

博士論文審査結果の概要

申請者氏名	浅井 良英			
審査委員会主査	職名	教授	氏名	定森秀夫
論文題目				
近江における方形周溝墓の研究				
論文の内容の要旨および審査結果の要旨				
<p>本学位論文は、近江における方形周溝墓を集成し、形態分類を主軸にその変遷過程をとらえ、近江における弥生時代の社会構造の変化を詳細に分析・検討したものである。本論文は全8章で構成されている。</p> <p>序章では、方形周溝墓研究史がまとめられ、近江の弥生時代の社会構造を解明するという問題意識が鮮明に打ち出されている。第1章では、方形周溝墓の分類基準などを論じ、第2章以降の考古学的分析のための方法論を提示する。第2章では、近畿・東海地域の弥生前期の方形周溝墓を集成・分析し、弥生前期の社会構造を想定する。弥生前期は縄文時代から続く従来墓(土壌墓など)と新たな墓制である方形周溝墓が造られるが、両墓造営集団間にはまだ階層差が認定されない社会構造であったとする。第3章では、守山市服部遺跡の約360基の方形周溝墓を詳細に分析し、服部遺跡の社会構造を想定する。服部遺跡は弥生中期全期間にわたって複数の集団の共同墓域であるが、方形周溝墓群の詳細な分析から、中期中葉と中期後葉との間に大きな画期があり、その前後に集団間の階層化が進むとする。第4・5章では、湖南・湖東・湖北・湖西の各地域の方形周溝墓を集成・分析して、各地域での方形周溝墓の受容・展開・衰退は同時併行で進展するのではなく、地域によって異なることを明らかにした。第6章では、近江への方形周溝墓の伝播に関してそのルートを推測するとともに、近江内では中期中葉に湖南地域から湖東地域へ方形周溝墓が伝播したとする。そして、近江全域の方形周溝墓群の様相を様相Ⅰから様相Ⅴまでの5段階に分けて、社会構造の変化をまとめている。様相Ⅰは、墓域に方形周溝墓が現れる段階で、弥生前期に該当する。様相Ⅱは、方形周溝墓が普及し標準的な墓制として定着する段階で、湖南地域では中期前葉、湖東・湖北・湖西地域では中期中葉に該当する。様相Ⅲは、方形</p>				

周溝墓に明確な群構成が現れる段階で、湖南地域は中期中葉、湖東地域は中期後葉、湖北・湖西地域は後期に該当する。様相Ⅳは、方形周溝墓の形態が多様化し規模が大型化する段階で、湖南・湖東地域では中期後葉、湖北地域では後期に該当する。様相Ⅴは、定型前方後方形周溝墓が現れる段階で、湖南地域では古墳初期、湖東・湖北地域では後期に該当する。そして、終章では本学位論文の研究成果と今後の課題をまとめている。

本学位論文が独自性をもち優れている点を挙げる。第一に、滋賀県全域の110遺跡1656基の方形周溝墓および近隣の弥生前期の20遺跡を集成し、その上で方形周溝墓の規模などをデータ化し比較するための図表化を行っている点である。滋賀県内の地域ごとの部分的な集成はあるものの、滋賀県全域の方形周溝墓を網羅的に集成した研究はこれまで全く行われてこなかったことから、極めて重要な基礎的作業であると評価できる。第二に、このように集成されたデータを用いて方形周溝墓および墓群などの形態分類を行い、比較検討する作業も極めて丁寧に進めている点である。この分類と土器編年に基づいた年代観を用いて、方形周溝墓および墓群の変遷や地域間の相違などを明らかにしていることも評価される。第三に、以上の熟達した考古学の方法論の成果によって、近江における弥生時代の社会構造の解明に果敢に挑戦をし、独自の社会構造論を提起している点である。まず、湖南・湖東・湖北・湖西地域の各地域での方形周溝墓の受容・展開・衰退が同時併行ではないことを明らかにし、さらに相互の影響関係にも言及している点である。そして、弥生時代の社会は一般的に階層社会と認識されることが多いが、方形周溝墓および墓群の分析から、社会の階層化は弥生時代の当初から始まるわけではないこと、また階層化プロセスを5段階に分期し階層化が徐々に進行して行くことを具体的に示した点である。そして、様相Ⅲと方形周溝墓の形態が多様化し規模が大型化する様相Ⅳとの間に、湖南・湖東地域で見ると中期中葉と中期後葉との間に大きな画期が認められることを明らかにしたことは大いに評価できる。このような点から、方形周溝墓という考古資料を通して弥生時代の社会の階層化プロセスを解明した説得力ある論文として、審査委員(定森秀夫・田中俊明・中井均・小林青樹・若林邦彦)は博士学位を授与するに値すると判断した。なお、浅井氏は定年退職後、奈良大学通信教育学部を経て、本学で博士前期課程・後期課程5年間の研鑽を積み、70歳での博士学位取得となる。生涯学習の鑑足りえることも付け加えておきたい。